



学祖 山田顕義

日本大学の学祖・山田顕義は、弘化元年(1844)、長門国(現山口県)萩郊外の長州藩士の家に生まれました。藩校明倫館に学ぶ一方、14歳の時、吉田松陰の松下村塾に入門し、学問と精神面で大いなる影響を受けました。松下村塾では、のち山田と生涯かわりを持つ少し上の先輩に伊藤博文や山県有朋がいます。

山田顕義

20代の前半は数々の戦闘に参加し、軍人として優れた才能を見せます。戊辰戦争の発端となった、慶応4年(1868)鳥羽伏見の戦いでは京都の長州藩兵を指揮し、その後も新政府軍の参謀として函館まで転戦し、戦争終結に貢献したのです。



木戸孝允

の第2幕、司法への道が始まっていきます。

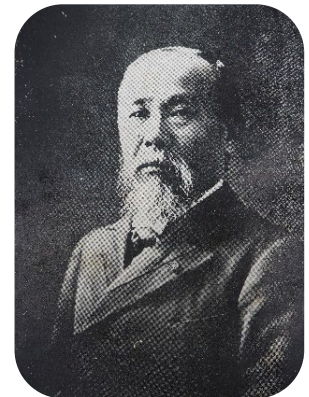
明治7年司法^{たいふ}大輔(司法省次官)となり、16年に司法卿。18年の内閣制度発足とともに初代司法大臣として入閣し、民法・商法等の編纂に取り組んでいきました。

明治22年1月、山田は国典研究・神職養成機関で、設立・発展に尽力した皇典講究所の所長に就任し、政治学・法学を取り入れた講究所の改革に乗り出します。その頃、若手法律学者らが日本の法律を教育・研究するための学校設立を計画していることを知り、全面的に援助し、同年10月、皇典講究所内に日本法律学校(本学の前身)が創立されたのです。

明治25年(1892)11月、生野銀山視察中に急逝。49歳。墓所は東京都文京区の護国寺。

明治4年(1871)には、岩倉使節団に随行して約2年間にわたる欧米視察の旅に出ますが、このとき、長州の大先輩で使節団の副使木戸孝允から、開明的な思想や近代法整備の必要性について親しく教えを受けました。

帰国後、山田は建白書を提出しましたが、そこには「兵は凶器なり」と軍備拡張路線を批判し、法律や教育組織等の整備が先決であるとの認識が示されており、山田顕義の人生



伊藤博文



山県有朋

展示資料一覧

資料名	作者	年代
明治 11 年特命全権大使米欧回覧実記（復刻）	久米邦武編	1975 [昭和 50]
朝日百科「日本の歴史」9	朝日新聞社	1989 [平成元]
山田顕義「建白書」		1873 [明治 6]
山田顕義関係資料	日本大学精神文化研究所	1985 [昭和 60]
別働第二旅団戦記	陸軍少尉安藤定誌	
西南記伝	黒龍会本部編	1908 [明治 41]～
西南戦争終結後の陸海軍少将集合写真		
ボアソナード氏起稿民法草案財産篇講義	司法省	
ボアソナード先生功績記念	ボアソナード教授記念事業発起人委員会	1935 [昭和 10]
ロエスレル氏起稿商法草案（複製）	司法省	
憲法発布式之図	小島勝月画	1889 [明治 22]
皇典講究所講演 第 1 号	皇典講究所	1889 [明治 22]
臨時科外講義録	私立日本法律学校	1890 [明治 23]～
第一年級講義録	私立日本法律学校	1890 [明治 23]～
吉田松陰から与えられた扇面「与山田生」（複製）		
鹿児島暴徒降参之図（西南戦争西郷軍降参錦絵）	月岡芳年画	1877 [明治 10]
大日本官員鑑（錦絵）	楊洲周延（橋本直義）画	1882 [明治 15]
皇国官員鑑（錦絵）	楊洲周延（橋本直義）画	1880 [明治 13]
明治 21 年 8 月枢密院会議之図（石版画）	改進黨新聞附録 1622 号	
山田顕義書簡（長三洲宛）		
空齋山田伯遺稿	村田峰次郎編	
山田顕義遺愛品茶道具 茶碗・茶筴・茶杓・棗		